

院外茶話

vol.75 平成23年8月1日

孤立をした人は
生き甲斐はない
生き甲斐とは人間関係です
—石川達三—

ジジ・セラーノの爺



看板は実物以上だけど。

ワインセラーのような建物が半地下にあって、ここでカレーカフェを営むのが環さん。爺がいるセラーなので、店の名は「ジジ・セラーノ」。

カレーの評判はととてもいいけれど、そんなことよりも、このユルキャラのような、愛すべき人物を除いて自由が丘は語れない。女神像の横に飾っておきたいと思ったこともある。タマモンなんていう名前をつけて。

生まれも育ちも自由が丘。兄君は由緒ある藤原写真場の主である。この写真場は先代が始めたもので、スタジオとも写真館とも名を変えないところに、老舗の意気込みを感じる。

モンブランや亀屋万年堂ができたのは1920年代から30年代。自由が丘が次第に洗練した街に発展をして、菓子店が豊かさの象徴ならば、同じ頃、藤原写真場は文化の象徴であった。

先代が秋田の出身であったことから、写真場に集ったのは同郷の人々で、その顔ぶれは石井漠、石坂洋次郎や石川達三など。岡本太郎も来たし、自由が丘の女神像を作った澤田政廣もいた。この人たちが、日毎写真場に酒を持ち込

んでは、麻雀に興じていた。と、これは環さんからの情報。

こんな環境で環さんは生まれた。1700グラム。名付け親もその石川達三氏であった。さぞかしかわいくて、知的な子と思われるだろう。

石川達三も石坂洋次郎も当時は人気作家で、ともに田園調布に居を構えていたので、環さんはたびたび使いに出た。余計なお世話かもしれないけど、せっかく昭和の文豪に会えたのだから、お駄賃だけを楽しみにしないで、もう少し別の話も聞いてくればよかったのに。



文化の源、藤原写真場です。

そんな環さんは社会に出て、何故か料理人を目指す。それは和食。銀座と愛宕の一流店で5年間修業の生活を送ったけれど、迷った末に再び写真家の道を選ぶ。そして、生涯で飛び切りの傑作を撮った。

それは、ある結婚式の写真を撮りに出かけたときのことであった。式場で花嫁付きの美容師を勤めていた、現奥方を射止めたのである。今にして思えば、写真家として働いたのは、このためだったみたい。

その後、十数年を写真家として暮らす、再び料理に心を馳せて、広小路通りに「したごころ」を開店したのが1988年。

「したごころ」は居酒屋と割烹と家庭料理が混ざったような感じで、大いに賑わいをみせたけれど、和食の下ごしらえは手間が大変。つ

いに体調を崩して、20年近くも続けた和食からの撤退を余儀なくされた。

しばらく休んで考えた次のコンセプトは
「スリムに、シンプルに、美味しく」
「酔っぱらいは、入れない」

こうして誕生したのが、カレーカフェのジジ・セラーノ。和食だろうとカレーだろうと、一つの料理がきちんとできれば、大概のものはできる。料理に愛情さえもっていれば。



ジジ・セラーノの店内

環さんの場合、その愛情が注がれるのは料理ばかりではなかった。いえ、決して他の女性という意味ではありません。

生まれたての子犬は前足が悪い。引き取り手がいなければ、保健所行きになることは明らかで、誰もが二の足を踏んでいた時に、手をあげるのが環さんだった。

まだ目もあかぬカラスの赤ちゃんが落ちてきた時に、手当をしたらカラスが居ついてしまった。すると、東京都の役人がやってきて、警告を受ける始末。

なぜ、警告を受けなければならないか。東京都環境局のホームページにこんな規則が書いてあった。

「ケガをしたカラスを見つけた場合、少し様子を見て、出血やケガなどがあれば、保護したところへ戻しましょう」。

結果がどうあれ、戻すだけならなぜ様子を見るのか。釈然としない。

こうして暮らしている間にも、三匹の猫がいて、世話好き、話好きの環さんの周りには人間と動物があふれかえる。私もその人間のうちの一人。

そんな環さんは一見、亭主関白。自宅に帰れば、縦のものを横にもしない。箸は自分の後ろにあるのに、オーイと言って奥方を呼ぶ。煮魚を食べるときには、小骨まで取ってもらっているのではなからうか。

料理の心得をもった人は普通、女房の作った食事に不満があっても、黙って食べる。ところがある朝、奥方の朝食が気に入らなかったのか、環さんは前日の残りのケーキを食べた。

とてもバツが悪い。重苦しい沈黙の後、案の定残りのケーキが飛び交って、古き良きアメリカ映画のパイ投げのよう。

顔を洗って、落ち着きを取り戻した環さんの、小さな目にはほんの少し生クリームが光っていた。光っていたら、面白かったのに。

こうして繰り返される戦いに、環さんが勝った試しはない。私も人のことを言えた義理ではない。それは重々承知をしておりますが。

環さんの場合、孫悟空とお釈迦様のような関係にあって、どうあがいても、所詮奥方の手のひらにいたのである。自他ともに認める依存症で、それは奥方が旅に出る前夜のことだった。突然の震えとともに40度の発熱。

当然、奥方の旅行はドタキャン。1回ならともかくこれが3回も続いたら、それはどう見ても普通の病気ではありません。

道の真ん中でこんな立ち話をするものだから、どうしても小声になる。顔をうんと近づけてさんざん、唾を飛ばしながらぺらぺらしゃべった後にこう言った。

環「僕ネ、新型インフルエンザにかかったの。自由が丘の第一号だって」

私「・・・」

インフルエンザは人に感染するということを知らないのか！

余計なことを書き過ぎて、カレーの紹介をする紙面がなくなったけど、とにかく、帝国ホテルで食べているように美味しいカレー。コーヒーだって並みの喫茶店には負けないものだから、是非ご賞味下さい。写真は一番人気の焼きカレーです。



ジジ・セラーノ: 03-3724-4346